

1 自分らしいスタイルが実現できるまち

地域と趣味と仕事が重なる暮らし

- 大阪や神戸のベッドタウンとして、阪神間の複数の市が毎年、「住みたい街ランキング」に名を連ねています。
- 新型コロナウイルス感染拡大防止対策で、業務のデジタル化が進行し、働く場所や働き方が変化し、通勤に便利で「通いやすいまち」から、地域とのつながりが持てる「住みやすいまち」を希望する人も増えています。
- 働く場所や働き方が変化することによりコミュニティへの関わり方や自分時間を考える機会になります。

課題

将来への取組

●柔軟な働き方に対する勤務環境が未整備である

- ・副業(複業)ができない勤務条件になっている
- ・勤務形態や勤務時間が固定的であるため、生活スタイルに合わせた柔軟な勤務ができない
- ・家族の転勤に合わせて転居する必要があり、継続して勤務することが困難になる
- ・企業によってはテレワークの環境整備や移行が不十分である
- ・有給休暇を取得しにくい雰囲気、長時間労働で趣味ややりたいことをする時間がとれない

【みんなの声】

- ・新型コロナウイルスの影響を受け、現在は会場参加とWeb参加のハイブリッド会議を運用している。
Web会議は遠方からの参加者の移動コストの削減、緊急時にはスピーディーな会議設営が可能である一方で、僅かながらタイムラグが生じたり、空気感が共有しにくかったりと視覚、聴覚のみでやりとりすることに意思疎通の面ではまだまだ不足感があるというデメリットに直面している。

●テレワーク環境の整備など、業務環境の整備を推進する

- ・労働市場の流動性を高め、複業、マルチワーカーの認知度を上げる
- ・企業は多様な働き方を実現するためのガイドラインを整備する
- ・企業は在宅勤務に対応する機器の整備等、業務のデジタル化(テレワーク)を推進する
- ・長時間労働を是正するために、企業がICT化などによって業務改善を進める
- ・地域の活動への参加を促すために情報を発信する

【みんなの声】

- ・(移住関連の話について)リモートワークの普及によって、都市から離れた場所でも仕事ができるという状況になれば、移住のしやすい環境になり、地域とのつながりもできるのではないだろうか。

※複業 複数の仕事を持つこと

※副業 メインになる本業が他にあることが前提で、サブ(補助)として収入を目的に行う仕事のこと

住みたい街ランキング（関西）の推移 20位以内にランキングされた阪神間の駅名

2017		2018		2019		2020		2021	
1位	西宮北口	1位	西宮北口	1位	西宮北口	1位	西宮北口	1位	西宮北口
2位	梅田	2位	梅田	2位	梅田	2位	梅田	2位	梅田
3位	なんば	3位	神戸三宮	3位	神戸三宮	3位	神戸三宮	3位	神戸三宮
4位	夙川	6位	夙川	5位	夙川	6位	夙川	6位	夙川
11位	宝塚	12位	宝塚	11位	宝塚	13位	宝塚	12位	宝塚
12位	芦屋川	17位	芦屋川	17位	芦屋川	17位	芦屋川	13位	芦屋川
		20位	西宮	20位	西宮	19位	尼崎		
						20位	西宮		

出典：SUUMO 住みたい街ランキング関西版（リクルート調べ）

2030年頃の間想像

●柔軟な働き方や生活スタイルが実践され住みやすさを実感できる

- ・複業や地域活動ができる柔軟な働き方や生活スタイルを実現している
- ・複業の実施により、いずれかが失敗しても経済的に困窮しない、セーフティネットが実現している
- ・在宅勤務など働き方の変化により、転勤に伴う転居や退職が必要でなくなる
- ・本来業務とは違う仕事を通じて、自分がやりたい仕事を実現できるようになっている
- ・通勤に便利で、大阪や神戸に「通いやすいまち」から本当に「住みやすいまち」と感じるようになっている

【雇用労働関係団体の声】

- ・2019年にスタートした国の働き方改革関連制度により、長時間労働の是正や年次有給休暇の取得について、経営者及び労働者の意識は変化し、「ワーク・ライフ・バランス」の実現を目指す動きは確実に高まっている。
- ・一昔前までは企業に就職する際、将来性が就職の決め手の上位にあったが、今は「ワーク・ライフ・バランス」が上位にくる。

2050年にめざしたい姿

●地域と趣味としごとが重なる暮らしを実現する

- ・家庭、職場以外の趣味や地域活動の場のサードプレイスができ、時間や気持ちにゆとりができる
- ・集う人がいて、住みたいまちに住み続けることができる
- ・居住地域と働く地域の二拠点生活（複数拠点生活）が当たり前になっている

【みんなの声】

- ・若者や会社員等が働きながらまちづくりに関わられるような活動の仕方を考える必要がある。

【地域おこし活動者の声】

- ・仕事と趣味、やりたいことの両立、重なりが増えてくる。



尼崎市上空

1 自分らしいスタイルが実現できるまち

いつからでも誰でもスタートアップ

- 阪神地域は兵庫県下でも大学等の高等教育機関が多い地域で、各大学では社会人を対象とする様々な公開講座が実施されています。
- 長寿化、また雇用形態や就業形態が多様化する時代では、社会人向けの学び直しやスキルアップのために高度で専門的な知識を習得する機会を求める声もあります。
- 新規分野における起業のスタートアップを支援できるまちを目指します。

課 題

将 来 へ の 取 組

● 社会人がスキルを学び直せる機会が少ない

- ・学校を卒業、就職したあとに再び学ぶ機会を持つ人が少ない
- ・実社会で磨いてきた技術や知識について、学びなおしによりブラッシュアップする機会がない
- ・阪神地域には多くの大学・大学院があり、専門的知識を習得できる環境にあるが、十分に活用されていない
- ・デジタル技術の進展で「省人化」や「自動化」が進み、高付加価値化への追求が懸案となっている
- ・起業にチャレンジしたいが、失敗時の生活不安や経済的懸念があるため、ハードルが高い

※ブラッシュアップ

現状よりもよい状態を目指して、洗練させ完成度を高めること

● 高度な専門的知識を習得する機会が広がる

- ・専修学校、大学や大学院は、社会人が高度で専門的知識を習得できるように、返還不要の奨学金制度や、受講しやすい時間帯の設定などに取り組む
- ・大学・大学院等は、産業界と連携、接続を強化し、幅広い分野の教育プログラムを構築し、社会人が学べる機会を拡充する。
- ・労働力の高生産性、高付加価値化の追求と実現のため、起業への理解を高める
- ・ジョブ型雇用の導入も検討する企業が増える

※ジョブ型雇用

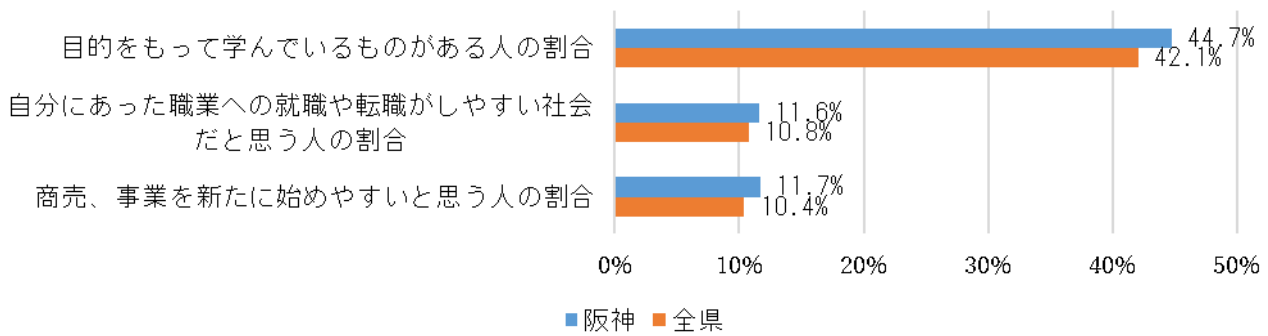
企業が人材を採用する際に職務、勤務地、時間などの条件を明確に決め、別部署への異動や他拠点への移動、転勤がない雇用契約のこと

教育機関の数

	各種学校		大学		短期大学	
	国公立	私立	国公立	私立	国公立	私立
兵庫県	—	75校	5校	31校	—	17校
阪神地域	—	23校	—	10校	—	9校
全県比率	—	30.7%	—	32.3%	—	52.9%

大学本部（事務局）の所在地により集計
出典：令和2年度学校基本調査。R2.5.1現在

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査



2030年頃の間想像

●複業、転職、起業へのハードルが低くなる

- ・阪神地域内の大学を中心として、学びなおしを目的とする企業人のスキルアップ講座が普及している
- ・卒業→就職→定年という単一的なライフサイクルが見直されている
- ・複業、転職、起業がしやすい環境に変化している
- ・デジタル化の進展やサブスクリプション、シェアリングエコノミーの浸透で起業の初期費用の低廉化が進んでいる
- ・ジョブ型雇用の普及と定年の形骸化により、社会人自身が学び直しを必要とする

【みんなの声】

- ・モノを所有する生活から、リース契約などを活用し所有しない生活へかわる

【みんなの声】

- ・一人一人のやりたいことを後押しし合える地域コミュニティ、行政サービス、企業ビジネスなどが有機的につながり合う状態になっている。

※サブスクリプション

商品ごとに購入金額を支払うのではなく一定期間の利用権として定期的に料金を支払う方式

2050年にめざしたい姿

●起業、複業、転職がしやすく、スタートアップを支援するまちへ

- ・企業と大学が連携し、リカレント教育で自己の能力を磨き直すことが常態化している
- ・スキルアップ講座で身につけた力で複業、起業、転職が自由になっている
- ・新規分野で起業や複業した人が集い、お互いにスタートアップを支援するまちになる
- ・スタートアップ企業の関係者が集い、ノウハウを地域に還元している

【商工団体の声】

- ・起業・創業を目指す若者が、その技能・経験を身につけるため、市内多種多様な事業者が受け入れる仕組みづくりを模索するなど、自分自身が起業・創業する貴重な人材として市域の中で育ていけるシステムを構築する。

※リカレント教育

生涯にわたって教育と就労のサイクルを繰り返す教育制度

※スタートアップ企業

革新的な商品、サービスで社会的な課題に対応したり、新たな市場を開拓する創業から間もない企業

1 自分らしいスタイルが実現できるまち

多様な人々が住みやすいまち

- 阪神地域は、健康寿命が長く、健康なシニアが多い地域ですが、活躍の場が限られています。また、2021年のジェンダーギャップ指数で日本は156か国中120位と先進国の中でも最低レベルとなっています。
- 2021年4月、阪神間7市1町は「パートナーシップ宣誓制度」に関する協定を結び、性的少数者のカップルが公営住宅の入居や新婚世帯向けの補助などの行政サービスなどが受けられるようになりました。
- 年齢、性別、障害の有無等の違いに関わりなく、誰もが自分らしく生きられる社会を実現し、誰にとっても住みやすいまちを目指します。

課題

将来への取組

●シニア、女性が活躍できていない、また、少数派の方への理解が不足している

- ・高齢者人口の割合が高く、地域活動の担い手が減少している
- ・定年後のシニアが多数地域にいるが、意欲あるシニアの能力が地域づくりに繋がっていない
- ・男性の育児参加が進まず、性別役割分担意識が解消していない
- ・阪神間市町に女性市長が数多くいる一方で、意思決定過程への女性の参画は低い水準にあり、女性リーダーの登用が進まない
- ・障害福祉サービス事業所を利用する障害者の平均月額工賃が全国に比べ低額となっている
- ・性的少数者への理解が不足している

【雇用労働関係団体の声】

- ・労働市場に参入していなかった人(女性、高齢者、障害者)が、自分の能力を活かし、やりがいと、生きがいを持ち、社会貢献する一方で、家族や仲間とのつながりを通じて充実した生き方(ワーク・ライフ・バランス)が浸透した社会が必要である。

●あらゆる人々がライフステージに応じた多様な生き方が選択・実現できる機会をつくる

- ・シニアが、老人クラブのほかに生きがいや健康づくりなどの場を創出できるような場を創出する
- ・男女ともに仕事と子育てを両立できる環境を整備し、家庭や地域生活で人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会を目指す
- ・ジェンダーギャップのない、誰もが参画しやすい制度づくりに努める
- ・障害者にとって就労の場が多様になるよう、障害福祉サービス事業所の授産商品の販路拡大や農福連携に取り組む
- ・SOGIE ハラスメントの防止に取り組む

【地域コミュニティの声】

- ・地域活動を手伝いたいがどこに行けばいいかわからない人がいる。常設の場にふらっと立ち寄り、コーヒーを飲んで話ができると、住民の「やりたい気持ち」や「やるべきこと」を拾うことができる。

※SOGIE 「性的マイノリティ」の総称の一つ

SO:性的指向、GI:性自認、GE:性表現

○人種や性別といった表面的なものだけではなく、価値観や考え方などに重点をおく「ダイバーシティ」は、アメリカで始まったと言われてい
ます。日本でも「ダイバーシティ(多様性)」を受け入れ、多様性を受け入れて活かすという「ダイ
バーシティ&インクルージョン」という考え方が浸透してきました。企業にも働き手にもメリッ
トがあるこの考え方は、今後、より多くの企業で取り組みが進み、実践されることが期待され
ています。

L	女性の同性愛者(レズビアン)
G	男性の同性愛者(ゲイ)
B	同性愛者(バイセクシャル)
T	こころとからだの性の不一致 (トランスジェンダー)
Q	こころの性別、恋愛の方向性が定まっていな かったり、その変化している途中であるなどの人 (クエスチョニング)
+	上記以外にもたくさんの性のあり方があること から、包括的な意味を持たせるもの。

2030年頃の間画像

●誰もがありのままの自分を受け入れられ、望むような活動・自己実現ができるようになっている

- ・個人の生きがい・職務経験と地域のニーズとのマッチングが容易になり、コミュニティビジネスやソーシャルビジネスが盛んになっている
- ・女性の管理職比率が向上し、多様な分野でリーダーになる人が増えている
- ・障害者が自己実現できる社会になっている
- ・SOGIE に対する理解が深まり、身近な人が性的少数者であることを受け入れることが自然になっている

【地域コミュニティの声】

- ・人口減少は税収の低減になり、年間一括交付金での活動には限界がくる危機感を持っている。そのために各地域がある程度収益性を図り、活動を支え、かつ元気な高齢者にも活動の場を提供できることが必要と考える。
- ・「まちづくり委員会」は5年前から事業収入を得る活動を行っており、更に拡大するため、NPO法人化した。

2050年にめざしたい姿

●誰もが地域や企業で能力を発揮し、障害者、LGBTQ+も住みやすい社会になっている

- ・元気なシニアや女性が地域コミュニティのみならず、企業でも能力を発揮している
- ・社会や企業などあらゆる組織や活動において、ジェンダーによる平等が実現されている
- ・多様な働き方の実現で、障害者や性的少数者などが、自分らしいスタイルを実現し、公正な処遇が確保されている
- ・多様な人々にとって暮らしやすい地域であることが、地域外にも知られるようになっている

【阪神地域の学校に通う学生アンケート

(「30年後の阪神地域の理想の姿」の項目)

- ・誰もが国籍やジェンダーを気にせず、自分を素直にさらけ出せるまち

【子育て支援団体の声】

- ・女性の起業家、意欲、スキルが高い人が多い。

※ダイバーシティ&インクルージョン

社会において多様な人材の活躍を推進するための概念で、国籍や性別、障がい、性自認や性的指向、言語など人それぞれの違いを受け入れて尊重すること

1 自分らしいスタイルが実現できるまち

多文化共生で人々がいきいきと暮らせるまち

- 阪神地域には産業が盛んなエリアもあり、出稼ぎ労働者を受け入れてきた地域ですが、近年は、技能実習等のため地域で暮らす外国人も増えてきています。
- しかし、言葉の壁や生活習慣の違いにより、日本で生活するために必要な情報が外国人に伝わらず、地域住民からすると、日本になじもうとはしないという印象になる場合もあります。
- 異なる文化を理解し、同じ阪神地域住民として敬意を払う多文化共生社会の実現と誰もがコミュニティでいきいきと暮らせる社会の実現が望まれます。

課題

将来への取組

●外国人が増加しているが、日本人との交流が不足しており、必要な情報が伝わらない

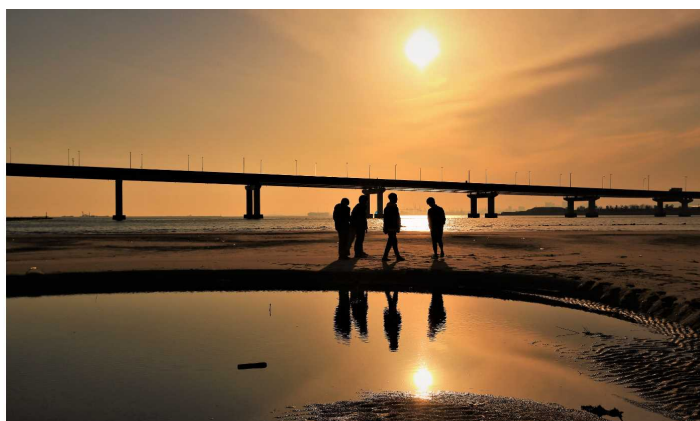
- ・東南アジア、南米等世界各国から技能実習や留学など観光以外の目的で一定期間を日本で暮らす人が増加しているが、受け入れ体制が十分でない
- ・日本人自身が、外国の生活や文化などについて理解不足である
- ・自分と異なる文化の人との積極的な交流が難しい
- ・外国人にとって日本語の習得が困難で、子どもの学校や地域とのコミュニケーションが少ない
- ・外国人にとって地域での生活に必要な情報が伝わらない

●地域に暮らす人々が、日本や外国の文化を学び、異文化交流をすすめる

- ・異文化を持ち合わせた外国人であるからこそ持っている感性やスキルなどを活かし活動の場を広げる
- ・日本人と外国人の居住者それぞれが相互の生活習慣や文化を知る機会を持てるようにする
- ・教育、意識啓発、交流事業によって地域に多くの文化的背景を持つ人々がいるということに対する理解を深める
- ・日本語教育を進めるだけでなく、母国語能力が不十分な外国人児童や生徒に母国語教育を実施する
- ・より多くの情報が多言語で得られるようにする

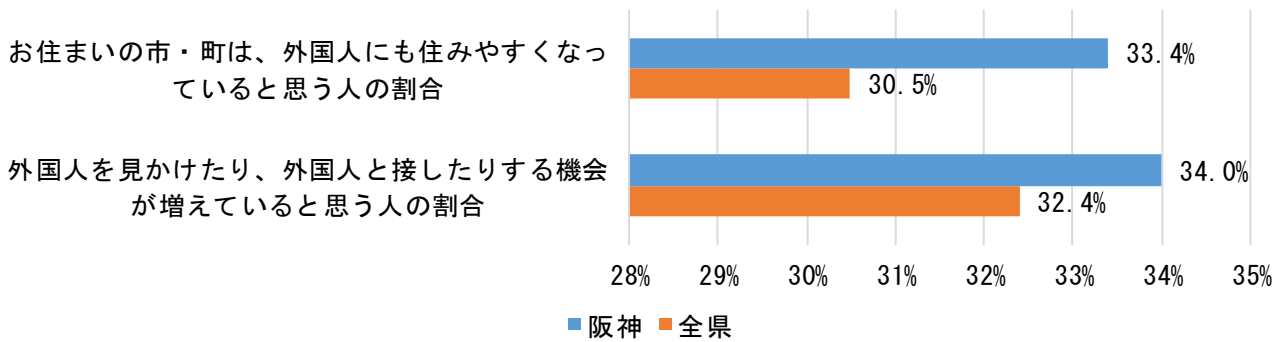
【外国人の声】

- ・他言語の表示があるが、英語を選択すると、情報量が日本語表示の半分くらいになってしまう。
- ・日本人はほかの国のことをあまり知らない。アメリカにしか興味が無い。私がスペインのことを話していても、興味がなさそうで寂しい。
- ・日本にいて困ったことはあまりないが、母は日本語がわからないので、全部通訳している。



阪神なぎさ回廊

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査



2030年頃の間想像

● 多様性を受け入れることで、日本と外国それぞれの良さを活かした取組が生まれる

- ・異文化の人々も地域に溶け込んだ生活を送ることができるようになる
- ・外国人は専ら支援を受ける側ではなく、主体的に地域コミュニティに参画するようになる
- ・自動翻訳で会話での言語問題はほぼ解決している
- ・多様な人種の人々が言語の不自由なく暮らすことが自然になっている

【国際交流団体の声】

- ・外国にルーツのある児童や生徒に対し、日本語学習と、母語や母国文化の継承の両立が必要。
- ・地域活動において外国人住民の参加を今まで以上に呼びかけることにより、日本人住民にとって次世代の地域活動の担い手が見つかり、外国人住民にとっては自己実現の場となる。

【外国人の声】

- ・言葉より先に大切なのは、違う世界に飛び込むこと。日本人はシャイだから、飛び込みたいと思ってくれるようになればよい。

2050年にめざしたい姿

● あらゆる人々がお互いに尊重しながら共生し、新しい価値観や文化が生まれている

- ・国籍や人種などに関わらず、それぞれの個性や文化的背景を尊重し、多様性を受け入れることができている
- ・様々な場面で外国人の意見が取り入れられ、新しい価値観や文化を育む
- ・外国人もコミュニティの一員として生き活きと活動している
- ・様々なコミュニティにおいて、外国人が参加することが当たり前のこととして受け入れられている

【国際交流団体の声】

- ・外国人を支援対象として扱うばかりでは外国人の自己肯定感が低下するので、社会参画を促し、自身も社会の構成員の一員であると意識づける必要がある。
- ・外国人県民とは対等に接する。まちづくりに関しても、外国人県民の出身地での知見など、学ぶことが多い。外国人県民には、日本人にはないスキルを持っている人が多い。
- ・まちづくり分野でもチャリティ活動などは外国人県民の方が、日本人よりも上手である。

2 自然、歴史、文化が息づくまち、人を育てるまち

未来まで続く花と緑と里山

- 阪神地域には、武庫川や夙川沿いの桜や、甲山森林公園などの都市近郊で花と緑を楽しめる魅力的な場所が数多くあり、良好な景観や環境を保全していく必要があります。
- 北摂地域には歴史・文化や生物多様性などを保つ里山が数多く、持続的な保全を図り、活性化につなげるため、「北摂里山博物館(地域まるごとミュージアム)構想」を推進してきました。しかし、近年少子高齢化による担い手不足、空き家や空き地の増加による環境の悪化などが自然環境保全活動に影響を与えており、自然環境や里山の保全に関わる人を増やす必要があります。

課題

将来への取組

●里山保全にかかる担い手の不足により、継承が困難になっている

- ・里山を守る活動や取組に参加したい人が増えているが、気軽に参加できる活動などが少ない
- ・里山保全の担い手が不足し、里山放置林が増加するとともに、地域住民の減少に伴い空き家や空き地が増加し、鳥獣被害が広がっている
- ・アウトドア活動が人気を集めているが、体験できる機会や場所が少ない

【生産者の声】

- ・茶道で使われる炭(菊炭)を使う人が減り、生産者も減少している。萌芽を再生という成長過程で必要な木を切ることや煙が出ることに對して移住者の理解が得られない。

●里山のファンやサポーターを獲得、拡大する

- ・「保全」と「再生」が両立する活動に関心が高まり、「行って見て、歩いて、参加し体験する」機会を増やす
- ・地域で活動をしている人たちが里山で文化的な活動や教育、スポーツイベントなどを企画し、交流人口の拡大や里山保全の意義を啓発する機会を教育・学習機関と連携して増やす
- ・緑の散策路、並木道等を整備し、良好な景観を創出するとともに、多世代が集い、交流するプロジェクトを各地域で実施し、清掃や維持管理に気軽に携わることができる仕組みをつくる
- ・地域に住む人々が積極的に里山保全に取り組み、農作物被害をなくすため、ICTを取り入れた鳥獣の捕獲及び利活用を促進する

【森林の保全活動】
パッチワーク状の景観が残され「日本一の里山」とも賞される北摂の里山の保全を行っています。



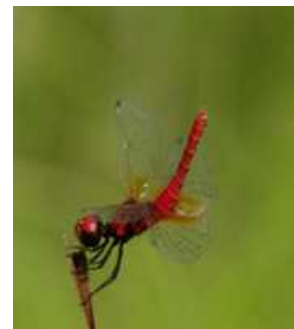
【ひょうご北摂里山ライド】
自然豊かな里山などの魅力的な景観や地元特産品等を楽しむサイクルイベントを開催し、交流人口の拡大や地域の活性化につなげます。

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査（阪神北県民局独自調査）

あなたは、森林ボランティアなど「北摂の里山」を守る活動や活動を支援する取り組みに参加したいと思いますか。

区分	H29	H30	R1	R2	R3
1) 里山活動への意欲 (回答1及び2)	16.4%	12.1%	16.3%	16.0%	20.5%

「北摂の里山」を守る活動に「すでに参加している」、「今後参加したいと思う」と回答した者は、近年16%前後で推移しているが、20.5%に増加した。



阪神地域のハッチョウトンボ

2030年頃の間想像

● 阪神地域の自然に人気が出て、自然を守る担い手が集まる

- ・里山への意識が高まり保全活動が広がることで、伐採体験や木々の加工などが人気の活動になる
- ・里山や森林保全に特化したボランティア団体や有識者などの専門家が各地でアウトドアビジネスと連携し、担い手が増える
- ・空き家や空き地、オープンスペースなどを活用し利用につなげ、アウトドアビジネスが拡大する
- ・花や緑の周遊散策路が整備され、人が集まり、景観を守るボランティアコミュニティができる
- ・ジビエ料理を目当てに観光客が訪れるようになる
- ・ICTを活用した獣害対策が進み、農作物等への被害がなくなり、農作物を育てる人が増える



いな桜街道（猪名川町）

2050年にめざしたい姿

● 里山や景観の保全と人々の定住、移住、交流が進む

- ・里山地域に住む人が増え、居住地やサードプレイスとしても人気の場所になる
- ・さまざまな担い手が育ち、里山が美しく保存継承されている
- ・都会からのアクセスのよさを活かした地域の自然を楽しむ人が増加し、アウトドア産業が確立している
- ・美しい自然の景観・環境が地域で守られ、花（桜など）・緑の回廊として国内外からも高い人気がある
- ・ジビエ料理や菊炭、原木椎茸など阪神地域産物がブランドとなり、地域資源を活かしたビジネスが成り立っている



里山の風景

2 自然、歴史、文化が息づくまち、人を育てるまち

みんなが憩う阪神なぎさ回廊

- 阪神なぎさ回廊は、尼崎、西宮、芦屋の臨海地域の海辺の魅力があふれる遊歩道や親水性の高い護岸などを結ぶ回廊です。
- また尼崎では、海(自然環境)と都市(人工的環境)が接する「なぎさ」を地域のシンボルとして捉え、尼崎21世紀の森づくりや尼崎運河再生プロジェクトを地域住民と協働で実施し、自然と都市の再生を図る環境先進都市づくりを進めています。
- 人々の暮らしにゆとりと潤いをもたらす水と緑豊かな自然環境を創出し、みんなが集うレクリエーションの場を目指します。

課題

将来への取組

● 阪神なぎさ回廊の知名度が低く、その魅力を伝える必要がある

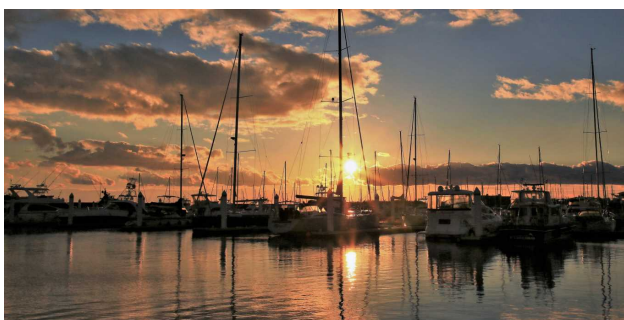
- ・天然の砂浜の香櫨園浜や御前浜、人口海浜の潮芦屋人口浜、干潟のある甲子園浜など海辺の生物や野鳥を観察できる場所がある
- ・西宮砲台や今津灯台など海岸線に特有の歴史的建造物がある
- ・環境を学びやすい場や自然が豊かな場所が都市部近くに多くあるが、十分に活用されていない
- ・阪神なぎさ回廊を楽しみながら阪神の魅力を感じるウォーキングコースやサイクリングコースが全部で7コースあるが認知度が低い
 - ✓ 武庫川・今津コース(7.5 km)
 - ✓ 西宮・香櫨園コース(10.5 km)
 - ✓ 尼っこりん・ロード(6 km)
 - ✓ 武庫川・甲子園コース(10.5 km)
 - ✓ 香櫨園・芦屋コース(9.5 km)
 - ✓ 尼崎コース(11.4 km)
 - ✓ 芦屋コース(6.1 km)

● 沿岸部の親水空間を知ってもらう

- ・認知度向上のため、行政や市民団体が情報発信やさまざまな交流イベントをすることによって、海岸部の親水空間をPRする
- ・阪神なぎさ回廊でのサイクリングやウォーキングに必要な整備を進める
- ・小さい子どもから高齢者までの誰もが、自然環境の大切さをいつでも学ぶことができる機会をつくる
- ・「尼崎の森中央緑地」ではヨガやミニキャンプのイベントを更に充実させ、「尼崎21世紀の森」でもスポーツを楽しみ、スポーツや食のイベントが盛んに行われるようにする

【尼崎の森について考える団体の声】

- ・尼崎の運河は、綺麗ではあるが人がいない。オランダの運河では情報がたくさん発信されている。この地域がオランダのようになれば良い。

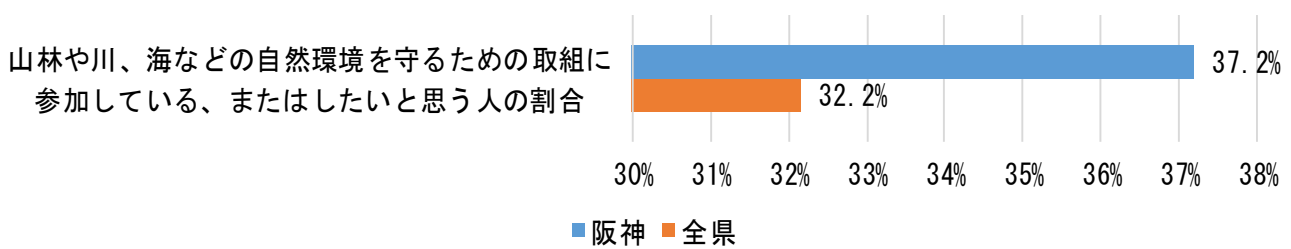


芦屋浜



尼崎21世紀の森 環境学習

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査



2030年頃の間画像

● 阪神の自然環境を活かした魅力のある阪神なぎさ回廊になる

- ・阪神なぎさ回廊が親水空間として認知度が向上し、人々が憩い、楽しめるような場所になる
- ・運河空間と親水空間の活用が進み、多様な場を提供できる運河利用環境(施設)が多くある
- ・阪神地域が環境に優しいまちとして有名になる

【尼崎の森について考える団体の声】

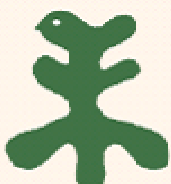
・尼崎をベネチアのような住宅街にするという考え方もある。ゴンドラがあったり、家があったり。30年くらいのスパンであれば考えることができる。

2050年にめざしたい姿

● 沿岸部の親水空間が人々の憩いの場、レクリエーションの場として賑わう

- ・自然と人間の共生に対する意識が高まる
- ・阪神地域の多世代が集う場となり、交流する活動場所としてにぎわい、生活の一部になっている
- ・阪神なぎさ回廊が地域外の人からも人気になり、憩いの場になる
- ・自然と人と産業との良好な共生関係を築き、持続的な発展が可能な環境先進地域になる

【尼崎 21 世紀の森構想について】



シンボルマーク

尼崎臨海地域は、重化学工業を中心に、日本の産業経済をリードしてきましたが、近代化の過程においてかけがえのない自然を失うとともに、公害の発生など環境面での課題や、近年の産業構造の変化等による工場等の遊休地が発生していました。

このような状況を踏まえて、尼崎臨海地域を魅力と活力あるまちに再生するため、人々の暮らしにゆとりと潤いをもたらす水と緑豊かな自然環境の創出による環境共生型のまちづくりをめざして、兵庫県では「尼崎 21 世紀の森構想」を平成 14 年 3 月に策定しました。

この構想策定後、この構想に賛同する多くの主体が中心となって森づくり(まちづくり)に取り組み、工場等の遊休地は減少しました。引き続き、貴重な資源である運河や工場の景観など特徴を活かした取組を県民・企業等の参画と協働により進めていきます。

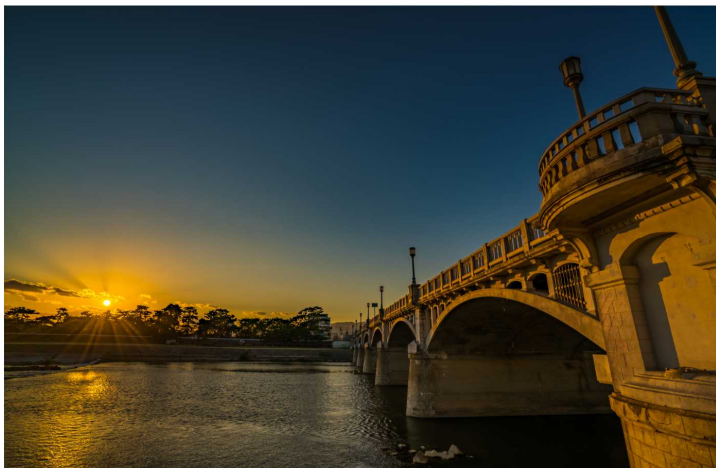
2 自然、歴史、文化が息づくまち、人を育てるまち 再発見で魅了する「阪神間モダニズム」

- 阪神間モダニズムとは、明治末期から昭和初期にかけて、商都大阪と港町神戸の間に位置する阪神間の鉄道沿線の住宅地開発によって生まれた新たなライフスタイル、芸術文化、価値観などの時代の潮流を指し、当時の独創的な建築物などからその様子をうかがうことができます。
- 阪神間モダニズムの認知度が低いままでは時間の経過とともに維持が困難となりますが、この地域で生まれた特有の文化であり、次世代に引き継いでいくべきものです。コーディネーターなど専門的な人材の育成や新たなまちづくりに活かすなど、阪神間モダニズムの発展や保存、継承を目指します。

課題

● 阪神間モダニズムの認知度が低く、その魅力を伝える必要がある

- ・阪神間モダニズムについて阪神間ではあまり知られていない
- ・阪神間モダニズムの作品は、建築・文学・芸術など多岐にわたる(作品例)
建築・・・尼崎市開明庁舎、武庫大橋、関西学院大学、ヨドコウ迎賓館、神戸女学院、甲子園会館、宝塚文化創造館、旧平賀家住宅
文学・・・谷崎潤一郎「細雪」
音楽・・・貴志康一(バイオリン)
美術・・・小出櫓重
- ・象徴となる建築物などは管理と維持費用がかかるため、継承や保存が難しい



あにあんフォトコンテスト 2020 阪神間モダニズム賞

「夕照の武庫大橋」(尼崎市・尼崎市側からの武庫大橋) 玉井勝典さん

将来への取組

● 幅広い人に阪神間モダニズム知ってもらう

- ・大学や行政、NPOなどが、大学、美術館、博物館、公共教育機関を活かした阪神間モダニズムについての学びの場をつくる
- ・行政などが子どもから大人まで幅広い世代の認知を拡大するため、イベントを行う
- ・阪神間モダニズム(建築など)を保存、継承するため、広報を積極的に行うとともに、XR技術のコンテンツを作成し、オフライン・オンラインを問わない阪神間モダニズム巡りを推進する

【文化団体の方の声】

- ・阪神間モダニズムの影響を受けた風光明媚な場所での文化発表は魅力のひとつ。京都、奈良等の歴史ある街に近いことから伝統的な文化に対する興味は人々の中に宿っている部分もあると思う。

【文化団体の方の声】

- ・阪神地域は「阪神間モダニズム」に見られるように、古くから文化芸術を大切にしてきた風土と歴史があり、多くの芸術家が在住、活躍する。

甲子園住宅経営地鳥瞰図/昭和5年(1930)

甲子園エリア、娯楽・スポーツ施設、学校、病院などが充実したガーデンシティの先駆けとして開発された(提供：阪神電気鉄道株式会社(社史より))



武庫川女子大学甲子園会館
(旧 甲子園ホテル)



武庫川に架かる武庫大橋



日本初の都市間電気鉄道として
開業した阪神電鉄

2030 年頃の間像

● 阪神間モダニズムに関する関心が深まる

- ・大学や美術館などで学んだ人たちからプロデューサーやコーディネーターなど、専門的な人材が育ち、建築物の保存、継承への活動にも積極的に取り組んでいる
- ・XR 等の技術を活かして阪神間モダニズムの歴史や文化が多くの人に知られ、阪神間モダニズムのファンが地域内外に増える
- ・阪神間モダニズムを知ること、住民や関わる人が地域に愛着を持ち、地域プライドが高くなる

2050 年にめざしたい姿

● 阪神間モダニズムが発展し、継承される仕組みができていく

- ・プロデューサーやコーディネーターが阪神間モダニズムを楽しむツアーを開催し人気になる
- ・XR などの先端技術が柔軟に活用され、いつでも人が集まり、楽しむ仕掛けが広がっている
- ・阪神間モダニズムの発展と継承が実現し、新たな地域づくりやまちづくりに活かされている
- ・古いものを大切にしながら、新しい考え方、文化や AI(人工知能)などの技術を受け入れて発展させ、阪神間の風土を継承している

※XR

VR(仮想現実)、AR(拡張現実)、MR(複合現実)などの先端技術の総称

許可取得後掲載

2 自然、歴史、文化が息づくまち、人を育てるまち

生涯の学びと次世代につなぐ阪神文化

- 「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査では、住んでいる地域のことに関心がある人の割合が、県内の他地域と比べ高い割合となっています。
- 阪神地域は特色のある博物館、美術館やホール、スポーツ施設もあり、地域と一体となった芸術活動や、スポーツ活動が展開されています。地域には公民館も多数あり、地域住民のつどいの場を形成するだけでなく、地域のことを学ぶ場としても提供されています。
- これら身近にある施設で、地域で育成した専門的な人材から阪神地域の文化に関する生涯学習の機会が得られるようにするなど、さらなる発展をしながら阪神地域の風土を継承します。

課題

将来への取組

● 伝統や継承文化についての認知が希薄で、その魅力を伝える必要がある

- ・子どもは社会との接点が限られており、体験学習やイベントなど多世代交流の機会が少ない
- ・地域の歴史文化をはじめ、地域資源を知る機会が少ない中で、地域の施設で多数の学習講座があるものの、多くの人が学び直しをできていない
- ・学び直しが趣味の範疇に収まらず、学びから地域活動につながる人材育成が必要である
- ・学校教育、家庭教育、社会教育、文化活動、スポーツ活動、レクリエーション活動、ボランティア活動、企業内教育、趣味による活動など、生涯学習の重要性が高まっている

【みんなの声】

- ・子どものころの体験は地域への愛着にもつながるため、歴史文化をはじめ地域のことを知る機会が必要である。
- ・オンライン化が進むからこそ、情操教育に力を入れてほしい。アナログな部分も大切である。

● 学びの機会をつくり、専門的な人材を育てる

- ・乳幼児期からの生活体験や小中学校の授業等で地域文化に触れる機会を増やす
- ・尼崎城、酒蔵産業、食品産業、西宮神社、上島鬼貫、三田藩(九鬼家)など、地域の歴史について、各地で勉強会や体験を行い、地元の魅力を発信する
- ・学校、大学(学生)、美術館や博物館、公民館、NPOなどの地域団体が地域と一緒にワークショップを開催し、ファシリテーターなど、学びをつないでいく人材を育成する

【みんなの声】

- ・「やりたい気持ち」や「やるべきこと」を拾い上げる場所には、面白い発想がうまれると思う。

※上島鬼貫

「東の芭蕉・西の鬼貫」といわれた江戸時代の俳人

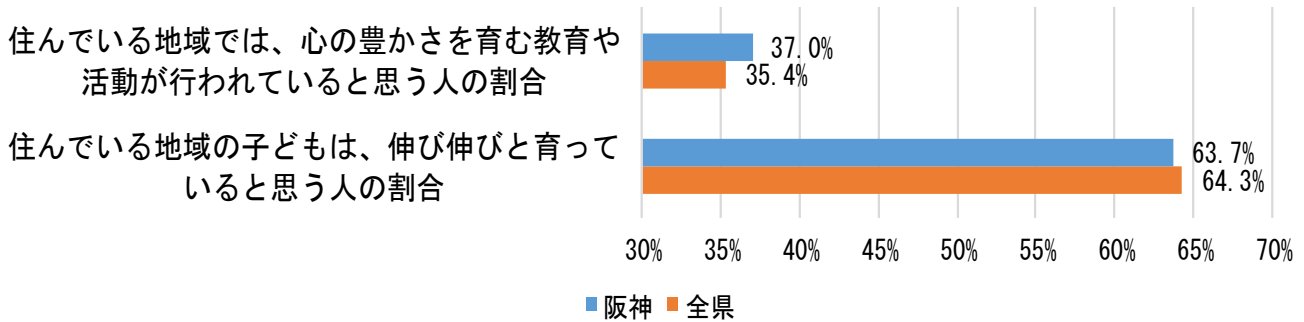
※九鬼家

南北朝時代から江戸末期まで活躍した一族。志摩国(三重県)の大名で水軍が有名



多世代交流による文化学習

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査



2030年頃の間想像

●地域を知ることや興味のあることなど、学びを深めることに関心が高まる

- ・地域に住む人の阪神地域の歴史や文化への認知度が向上し、地域プライドが醸成される
- ・子どもをはじめ、誰もが専門家による地域を学び知る機会・講座が充実し、関心や意欲が高まる
- ・地域の人々がいつでも、自由に学習機会を選択し学ぶことができ、その成果が地域や社会から評価されるようになる

【学生起業家の声】

- ・中学生や高校生でも「地域でこんなことができる」「何かしてみよう」「起業してもいい」と思える機会や、学びのためであれば何をしてもいいという場所があればいい。自分でプロジェクトをやってみる機会を多く与える事が大切だと思う。

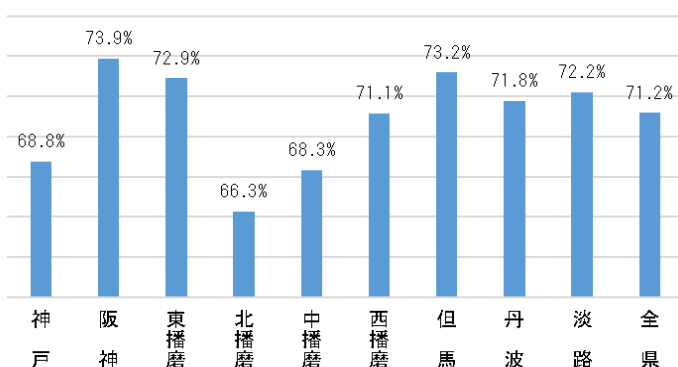
2050年にめざしたい姿

●地域資源を学び、さらなる発展をしながら阪神地域の風土を継承している

- ・原体験を多く得た子どもが地元へ愛着を持ち、積極的に地域のことを学ぶ人が増え、次世代へつながる
- ・豊かな地域資源の中で幼児からシニア層までライフスタイルに応じた様々な学びの機会があり、地域をつくる原動力につながっている
- ・歴史、文化、自然を活かし、阪神地域ならではの新しい産業や観光資源を生み出している
- ・古いものを大切に、新しい考え方やXRなどの技術を使いながら、阪神間の風土を継承している

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査

住んでいる地域のことに関心がある人の割合



【阪神地域オープンミュージアム無料開放DAY】

3 みんながつながるやさしいまち

地域で循環するエネルギー

- 近年、気候変動に伴う風水害等が増加し、大規模停電等ライフラインの寸断が多発しています。将来的に気候変動による影響がさらに拡大する可能性が高く、災害の多発が予想されます。災害に対応するためにも強靱で持続可能な地域づくりにつなげていく視点も重要です。
- 北摂里山の木質バイオマス資源、ソーラーシェアリングなど阪神地域の資源を活用した再生可能エネルギーの地産地消により、エネルギーを地域内で循環させることで経済循環、新たな雇用を創出し、自立した地域づくりにつなげます。

課題

将来への取組

●脱炭素社会に向けての意識の高まり

- ・省エネ意識やCO2排出の少ないライフスタイル、脱炭素社会(プラスチックごみの削減等)への転換が進んでいる
- ・ヒートアイランド現象により、阪神南地域の都市部は、阪神地域の他地域に比べて気温が高い
- ・気候変動の影響による局地的な豪雨、台風による風水害(高潮等)多発している

【みんなの声】

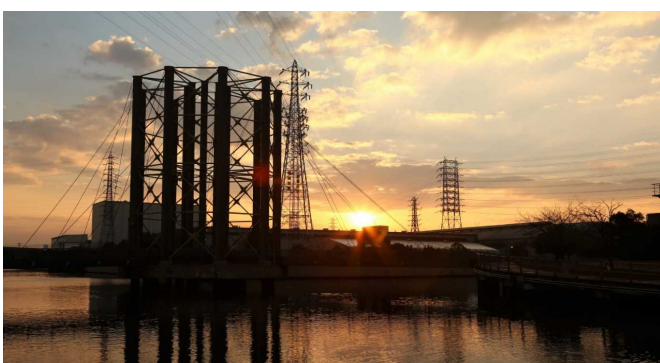
- ・国道43号線の排気ガスが気になっている。
- ・公園がもっと増えると緑も増えやすいのではないか。
- ・クリーン&デジタルが進めばもっと住みやすいまちになる
- ・低炭素化を進めるため、水素やアンモニアを使ったエンジンを開発している。もっと多くの人に脱炭素について関心を持ってほしい。

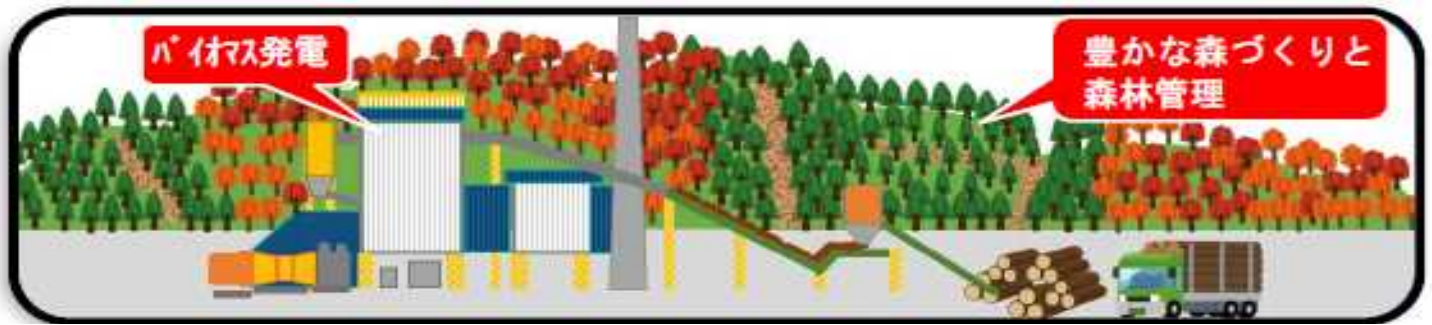
●太陽光発電、小水力発電、バイオマス発電など再生可能エネルギーの導入拡大

- ・ため池を有効活用した太陽光発電の導入に向けた研究を推進する
- ・地域団体が小水力発電の事業化に向けて調査や勉強会を実施する
- ・再生可能エネルギーを利用した未利用間伐材や広葉樹など木質バイオマス資源を有効利用する
- ・再生可能エネルギー導入に関するワークショップを開催する
- ・CO2吸収源としての森林・里山保全のため、小学生を対象とした里山体験学習を実施する

【みんなの声】

- ・阪神地域が脱炭素の先進地として有名になってほしい
- ・森の間伐資材を有効利用したい
- ・環境に優しく、阪神地域らしい緑、景色があるまちをめざしたい





2030 年頃の間画像

●地域循環共生圏のモデル事業の実施など脱炭素の取組が軌道に乗り始める

- ・農業生産と発電を同時に行うソーラーシェアリングが普及し始めている
- ・小水力発電や小規模バイオマス(木質バイオマス)ボイラーにより生じる熱を有効利用した地域循環共生圏のモデル事業が実施されている
- ・県内の再生可能エネルギー由来の電力を県内事業者へ提供する「ひょうご版再エネ 100」が展開されている

ひょうご版再エネ100

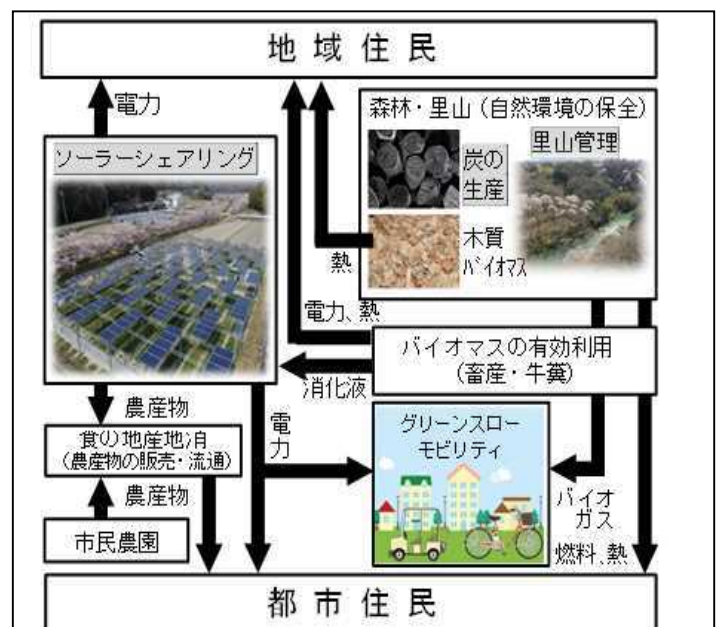


2050 年にめざしたい姿

●エネルギーを地域内で循環させ、脱炭素が進む

- ・エネルギーを地域内で自給することで地域経済の循環を生み出し、地域が自立している
- ・阪神地域の自然的要因や市街地の人工排熱、風通し等の人為的要因を含めた特性を把握したまちづくりが進められている
- ・低炭素なバス、シェアリングカー、小型モビリティなど、環境にやさしく多様な移動手段が整っている

地域循環共生圏のイメージ



3 みんながつながるやさしいまち

世代を超えてつながるまち

- かつて西宮市、宝塚市、川西市、三田市、猪名川町において開発されたニュータウンは、年々高齢化が進み、農村周辺部とともに、若い世代の転出や公共交通機関問題などの対応が必要になっています。
- シェアリングカー、小型モビリティの発達や自動運転の実現で、世代に関係なく住むことができ、また若い世代と経験豊富な高齢者世代が交流し、若い世代の子育てのサポートやアドバイスで不安が解消する、世代を超えてつながるまちを目指します。

課題

●高齢化にともない、オールドタウン化が進んでいる

- ・成熟したニュータウンや農村部からは若者層の流出が続き、高齢化が進んでいる
- ・子どもの数が減り、子育て世代を対象とした利便施設が少なくなるなど、子育てのしにくいまち、若者にとって魅力に欠けるまちになりつつある地域がある
- ・公共交通機関の路線や便数の減少など、エリア内外を結ぶ公共交通機関の確保が困難になりつつある
- ・発達している公共交通機関と利用者低迷による維持困難な地域が存在し、移動手段の格差が発生、高齢者や障害者の買物や通勤が不便な地域がある

【運輸業者の声】

- ・高齢者の社会参画、労働参加の必要性が高まっているため、移動手段の確保が課題である。
- ・ラストマイル問題（バス停から自宅までの移動手段がないこと）の発生や学校統廃合に伴う通学手段の確保も課題である。

将来への取組

●まちの活性化と、周辺地域の魅力向上に取り組む

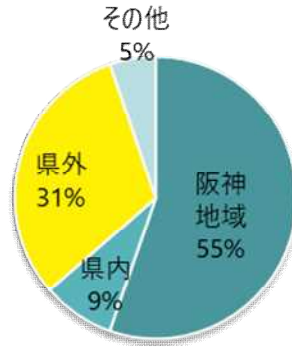
- ・空き家や公営住宅の状況を把握し利用につなげたり、リノベーションにより魅力を向上させる
- ・行政は若者世代やファミリー層の住宅の確保への助成に積極的に支援する
- ・子育て世代が住みたくするような、情報交換の“場”を充実させる
- ・農村部では、身近にある豊かな自然を活かし、様々な店舗やレジャーを展開させるなど、都市周辺のエリアも含めた魅力向上に取り組む
- ・高齢者や農産物を遠くまで運べない生産者の商品を販売所等まで路線バスで運搬する「貨客混載」など、新たなニーズを掘り起こし、まちと農村部をつなぐ路線の維持と利便性向上に取り組む

【みんなの声】

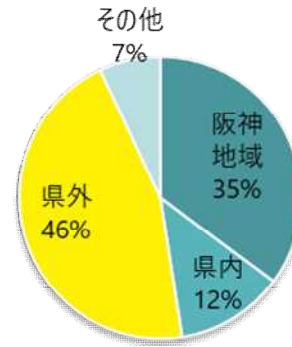
- ・ニュータウンで高齢化が進んでいる。このため、子どもを巻き込んで「ふるさとづくり」を行っている。しかしながら、ニュータウンには伝統行事がないことから、人と人のつながりを維持していくことが難しい。

阪神地域管内の高校生と大学生へのアンケート調査

30年後、
暮らしたい場所、
働きたい場所は
どこですか。



【暮らしたい場所】



【働きたい場所】

2030年頃の間像

●世代を超えたつながりができる

- ・落ち着いた住環境で子育てをしようとする若い世帯が増えている
- ・先輩世代から育児のアドバイスをもらえる“場”ができ、世代を越えた地域の交流が深まる
- ・ニュータウンの周辺部でグランピングなどの新しい郊外型レジャーの人気が高まっている
- ・Maasの機能を活用したデマンド交通の実証実験や自動運転の公道走行実験など次世代モビリティ導入に向けた取組が行われている

【運輸事業者の声】

- ・MM（モビリティマネジメント）活動として、高齢者、学童を対象に安全教室を開催し、バスの死角などを知ってもらい事故防止に努め、あわせて利用促進活動も行い将来の公共交通利用者の創出に繋げている。



多世代交流による地域学習

2050年にめざしたい姿

●ゆとりがある、成長できる環境で誰もが望みどおりに暮らしている

- ・賃貸住宅も含めて移住しやすい環境が整い、様々な世代の住民が暮らしている
- ・子どもたちと高齢者の交流が生まれている
- ・地域で気軽に集まれる場所やコミュニティができ、シングルでも参加できるコミュニティなど、様々な住民がコミュニティに参加している
- ・住民自らができるサービスを提供するなど住民同士の交流が盛んになり、新たなビジネスも生まれている
- ・農村部では農業以外にも様々な事業が行われており、様々な年代の多様な人々が暮らしている
- ・都市と自然がどちらも身近である環境を活かして、様々なレジャーを楽しんでいる
- ・各地に移動拠点の設置や幅広い世代を対象にしたモビリティ、自動運転の普及が進み、高齢者、障害者が快適に移動できたり、きめ細かな物流網がつけられたりしている

3 みんながつながるやさしいまち

自分にあった“つながり”に参加できるまち

- 現代社会では、個々人のライフスタイルの変化や多様化、高齢者の一人暮らしの増加により、人と人との触れ合いの機会や関係が希薄になっています。
- 年齢や性別、活動時間などに関係なく、支え合うつながりが構築され、助けがほしい人と助けたい人がつながることができる誰もが住み続けたいようなまちを目指します。

課 題

将 来 へ の 取 組

● 地域と個人のつながりが希薄になっている

- ・学校や会社以外でつながりの作り方がわからず、人と人とのつながりが希薄になっている
- ・子どもの数の減少や独居老人の増加など、孤独な人が増えている
- ・手助けを求めたり、悩みを相談できるような人が地域にいない
- ・ライフスタイルや嗜好の多様化に伴い、これまでのような密度の濃いつながりだけではニーズに合わなくなってきた
- ・既存のコミュニティに参加することに高いハードルを感じ、気軽に参加できるコミュニティがない
- ・コミュニティを探すツールの有無も分からず、探すのが大変である。特に転入者にとっては、どのようなコミュニティがあるのか分かりにくく、参加することが難しい。

● 様々なつながり方でつながるきっかけや仕組みをつくる、NPOが支援する

- ・キャンプやバーベキューなど、地域主体の一体感を醸成するイベント等を行い、地域の人々がふれあう機会をつくる
- ・登下校のあいさつや見守りパトロールなどにシニア世代が関わるなど、様々な世代がふれあう仕組みをつくる
- ・手助けがほしい人と手助けをしたい人を地域のなかでつなげたり、悩みを地域で相談できるような仕組みをつくる
- ・既存のコミュニティの情報をオープンにして、コミュニティがあることを分かりやすくするとともに、参加しやすくする
- ・マッチングアプリなどの気軽に話したり、悩み相談などができるツールの利用を広げる
- ・NPOは資源の発掘や課題を掘り下げ、専門分野の活動を基礎として、地域活動を支援する

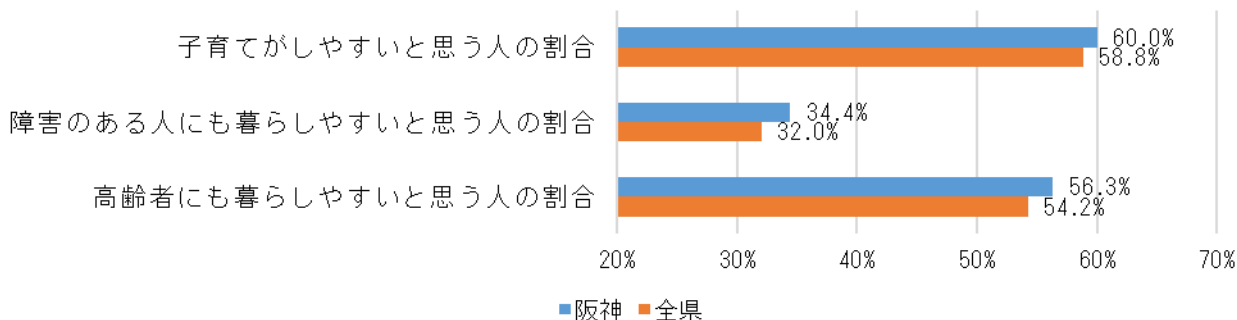


興味があるイベントへの参加

※マッチングアプリ

年齢、性別などに関係なく、何かのテーマでつながることができるアプリ

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査



2030年頃の間想像

●つながることの良さが再認識され、様々なつながり方ができるようになっている

- ・登下校のあいさつ運動などで地域の治安が維持されるなど、日常のつながりが重要であることを再認識されるようになる
- ・年齢、障害の有無にかかわらず、つながりが構築され、助けがほしい人と助けたい人がつながる。
- ・コミュニティを簡単に見つけられるようになっており、内容やつながる密度など望むようなコミュニティに簡単に参加できるようになっている
- ・日常的なマッチングアプリの利用が見られ、アプリを通じて様々なコミュニティが形成される

【県民からの意見】

- ・今後どんなにIT技術が発達しても、大事な価値は、「人間の温かみ」だと思う。



多世代交流による地域清掃

2050年にめざしたい姿

●自分にあつた“つながり”に参加できるまちを実現する

- ・地域の子育て世代、高齢者、障害者といった人に地域の人に関心を持つようになり、手助けを求められたら、さりげなく手助けをすることが当たり前になっている
- ・オンライン、オフラインを問わず、意思疎通が可能となり、地域で安否が確認できるようになると、認知症のある方や高齢者、障害者の方も住みやすいユニバーサル社会へとつながっていく
- ・年齢、性別、趣味、嗜好以外でも自分にあつたつながりを持つことができる
- ・人々が地域に愛着を持ち、住み続けたいと思うようになる

【地域デザインを考えるワークショップでの意見】

- ・IT活用で気軽に情報交換や相談ができるバーチャル家族のしくみや、困っている人と地域をつなぐマッチングアプリで支え合うしくみがあれば、共通の趣味や同じ目標を持ったコミュニティに身を置くことで個々の成長につながる可能性がある。
- ・現実の家族には相談できない悩みを相談できるような憩いの場所を作ったり、特性を登録し、その情報からAIが参加者の興味関心や専門分野などを元にマッチングを行うことで、解決を図る。

3 みんながつながるやさしいまち

みんなで進める防災・減災

- 阪神地域は兵庫県の中でも都市化が高度に進んだ地域ですが、古くから氾濫を繰り返してきた武庫川などの河川や沿岸部に海拔ゼロメートル地帯があるなど、一度災害が発生すると甚大な被害が発生するおそれのある地域でもあります。
- これらの災害に対する備えは、長年にわたって取り組んできましたが、近年、県下の様々な地域が災害に見舞われており、阪神地域においても平成30年台風第21号による高潮災害が発生しました。
- ハード対策は進められていますが、住民は想定を上回る事態に備える必要があります。

課 題

将 来 へ の 取 組

● 甚大な災害が発生するリスクが高まっている

- ・今後30年以内に70～80%の確率で南海トラフ巨大地震が発生すると予測されており、津波被害の発生が懸念されている
- ・温暖化の進行とともに、大雨が増加、線状降水帯など雨の降り方も変わってきており、水害が激甚化傾向にある
- ・台風に伴う大雨や暴風、局地的に集中する大雨により、河川氾濫や土砂災害、高潮被害の危機が高まっている
- ・国土強靱化により河川対策や津波対策、高潮対策のため防潮堤の整備などのハード対策を進めているものの、ハード対策の想定を上回る災害が発生するおそれもあるため、避難等のソフト対策が求められている
- ・ハザードマップにより居住地や勤務地エリアの危険箇所を常日頃から把握するなど一人ひとりの防災力を高める必要がある

● 防災訓練、要配慮者への個別避難計画などのソフト対策を住民と一体となって充実させる

- ・行政は、ハード対策を進めるとともに、どのような災害リスクがあるのかを住民に知ってもらう
- ・災害が他人事にならないよう、保育施設、学校での防災教育を充実させる
- ・要配慮者や避難行動要支援者について、特徴に応じた個別避難計画の作成など、避難行動の支援体制を整備する
- ・要配慮者、外国人居住者も含めた住民は、災害時に確実に避難できるように、防災訓練にも積極的に取り組むなど一人ひとりが普段から備える
- ・あらゆる災害情報や避難情報の多言語化を進めるとともに、外国人居住者も防災訓練に参加できるよう、外国人を支援する団体と連携する

【防災士の声】

- ・住民の自発的活動を増やす取組や、将来の担い手である児童、生徒、学生との連携が必要である。
- ・ベトナムの留学生、実習生を2年前から受け入れ、地域の防災活動に参加している。

※要配慮者

高齢者、障害者、乳幼児その他特に配慮を必要とする人

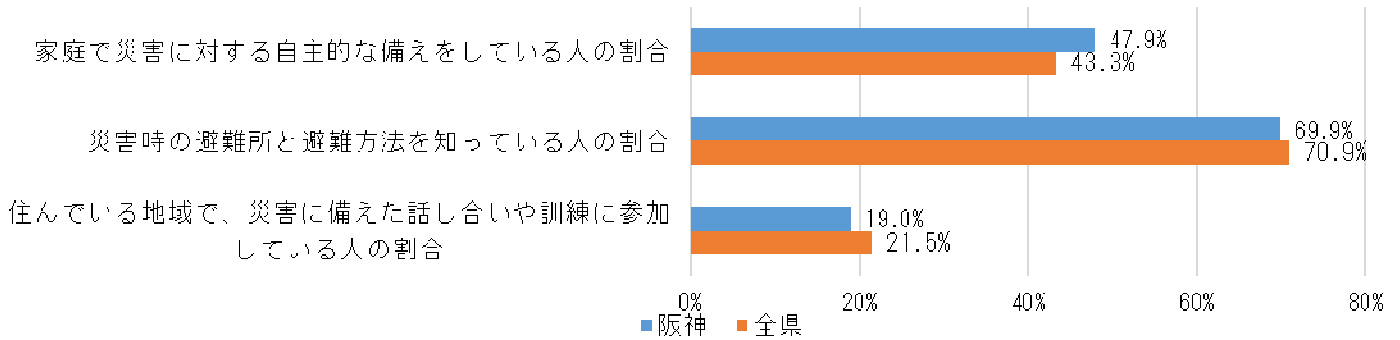
※避難行動要支援者

要配慮者のうち、災害時に円滑な避難の確保を図るため特に支援を要する人



高潮を想定した現地調査

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査



2030年頃の間画像

●災害に対するハード対策が進み、ソフト対策が整ってくる

- ・各地域における災害リスクに応じ、ハード対策だけでなくソフト対策も含めた総合的な対策が進む
- ・個別支援計画に基づいた災害弱者を地域で助けて避難できるしくみができている
- ・日頃から、災害弱者の方、小さな子どもがいる家族、外国人居住者などへの目配り、気配りができる“おせっかいがおせっかいでない”コミュニティができている

【防災士の声】

- ・市民一人ひとりに対して、危機意識を持ってもらえるような啓発活動を行い、災害弱者自身が行動できるような支援を増やす。その対応として交流が増える施策が極めて重要である。



図上想定訓練

2050年にめざしたい姿

●誰一人取り残さない避難行動ができる

- ・ハード整備で一定規模の災害を防ぐとともに、関係機関の連携協力やコミュニティでの助け合いにより全住民が避難ができて、災害が発生しても人命が守られるようになっている

【留学生を受入れている方や防災士の声】

- ・人間らしい生活なしでは、充実した生活はできない。地域コミュニティの交流を増やす策を構築し、お互い様の社会を作ることが重要で、災害対応を考えれば、被災が想定される地域との支援・連携に目を向ける事も必要である。

【阪神地域の学校に通う学生アンケート(「30年後の阪神地域の理想の姿」の項目)】

- ・南海トラフの対策をし、乗り越えて新たな世代との繋がりを強め、にぎわいのある地域



尼崎臨海地域

3 みんながつながるやさしいまち

いきいき健康100年人生

- 誰もが住み慣れた地域で、自分らしく安心して暮らせる社会の実現を望んでいます。
- しかし、少子高齢化により、団塊の世代すべてが2025年に75歳以上の後期高齢者になる社会が迫っています。
- 医療、介護、予防の仕組みを構築し、高齢者の持てる力を発揮しながら生活を継続できる支援や見守りで、いきいき健康100年人生を目指します。

課題

将来への取組

● 高齢化の進行に伴い、認知症やフレイルに対する理解が必要である

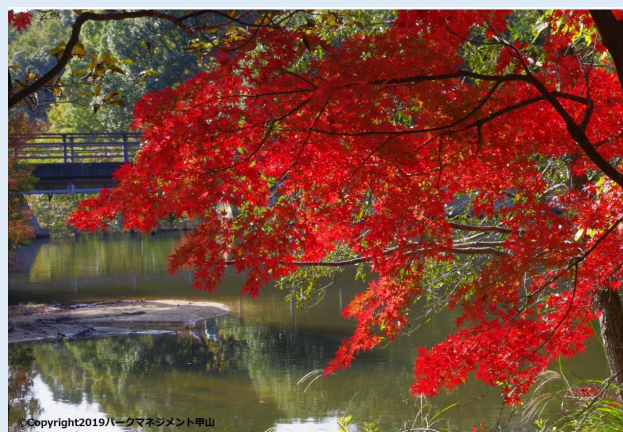
- ・高齢者人口が増加し、全人口に占める割合が高くなり、医療や介護の専門職の連携が必要である
- ・認知症の人や高齢者が可能な限り住み慣れた地域で自立した日常生活が送れるよう、在宅サービスの内容や量を充実させ、「地域包括ケアシステム」の構築に向けた取り組みを推進する方策が展開されつつあるが、十分ではない。
- ・フレイル(加齢による心身の虚弱化)予防の取組の着手段階にある
- ・体力や年齢に応じて気軽に楽しむことができる生涯スポーツを普及させる必要がある

● 認知症対策やフレイル予防の取組を推進する

- ・地域の人から孤立することのないよう、認知症の人や家族が医療や介護の専門職に相談でき、安心して過ごせる認知症カフェの整備や活動を一層進める
- ・住民運営の「通いの場」づくりを一層進め、認知症の疑いのある人の早期発見に向けた取組を推進する
- ・認知症予防体操の普及などの認知症予防対策やフレイル予防対策を進める
- ・イベントなどを行い、生涯スポーツの普及に努める

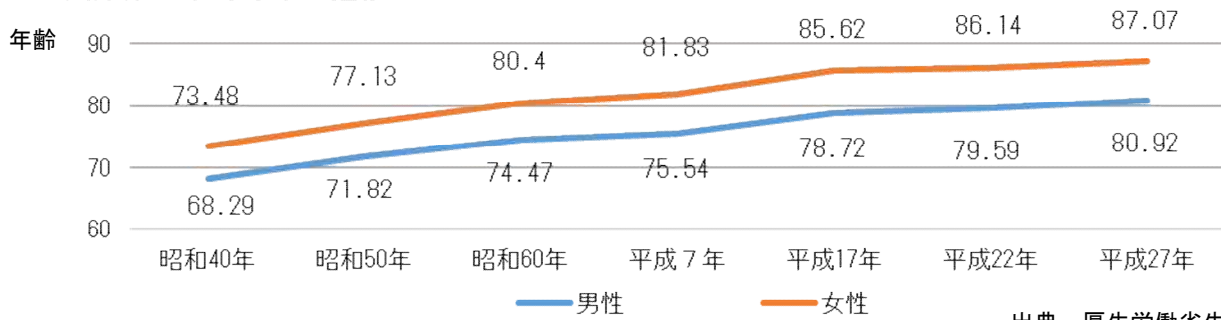


尼崎 21世紀の森



甲山森林公園 阪神地域の豊かな自然

兵庫県平均寿命の推移



出典：厚生労働省生命表

2030年頃の間想像

●医療と介護の連携が強化されている

- ・住民運営の「通いの場」、「サロン」等に高齢者が参加することにより、リハビリテーション職や管理栄養士、歯科衛生士などと連携し、運動・栄養、口腔の観点も含めて高齢者の状況を確認できる体制が整う
- ・必要な人へ受診勧奨を行い、受診結果の把握等を行うことで、介護サービスにつなげる取組を進める
- ・パワーアシストスーツなど、活動を支える技術開発が進み、高齢者の労働を補助する
- ・視力・聴力・記憶力を高める先端デバイスが普及し、高齢者の活動領域が狭くならないようになっている
- ・スポーツに意欲的に取り組むなど、生活の質(QOL)の向上を重要視するようになる
- ・Maasの機能を活用したデマンド交通の実証実験や自動運転の公道走行実験など次世代モビリティ導入に向けた取組が行われている(再掲 シナリオ10)

※QOL (クオリティ・オブ・ライフ)

どれだけ人間らしい生活や自分らしい生活を送り、人生に幸福を見出しているか、ということをもとに尺度としてとらえる概念

※Maas (Mobility as a Service : 通称マース) (再掲 シナリオ10)
交通手段をまとめてより便利な移動を実現する仕組み

2050年にめざしたい姿

●健康寿命の延伸化と自分らしい暮らしが実現している

- ・認知症に対して理解が得られるようになり、支えあっている
- ・検診体制や健康づくり活動の充実で健康が守られている
- ・ICTを活用した遠隔診断・医療が導入されている
- ・元気な高齢者が増加し、生活の質(QOL)が向上する
- ・誰もが生涯現役で趣味、スポーツ、仕事、地域活動などにいきいきと取り組んでいる



尼崎スポーツの森

4 にぎわいのあるまち

アートによるクリエイティブな環境づくり

- 明治時代以降、阪神地域に居を構えた大阪の裕福な商人や実業家たちが、コミュニティの形成や私学を創設した結果、著名な作家や芸術家が活動し、この地域の文化が発展しました。
- 伝統芸能は後継者を確保することが課題で、安定的な保存継承が望まれます。
- 薪能などの伝統芸能からクラシックの音楽コンクール、オペラ、市民による手作りの音楽イベントや美術的なイベントなどが繰り広げられ、地域に住む人々を魅了します。

課 題

● 多彩な特色あるアートイベントや舞台芸術が開催されているが、認知度が低い

- ・誰もが身近に芸術に親しむ機会を提供するため、多彩な特色あるアートイベント、舞台芸術が開催されている
 - ✓ 野外アートフェスティバル(西宮市)
 - ✓ アシオト(芦屋市)
 - ✓ 「鳴く虫と郷町」、伊丹オトラク(伊丹市)
 - ✓ ITAMI GREENJAM(伊丹市)
 - ✓ 宝塚音楽回廊(宝塚市)
 - ✓ 川西音楽祭(川西市)
 - ✓ ONE MUSIC CAMP(三田市)
 - ✓ のせでんアートライン(川西市)
 - ✓ Kawanishi Art Project-LIVE(川西市)
 など多数
- ・伝統芸能のなかには認知度が低く、保存継承が課題となるものもある
- ・多種多様な特色あるホールや美術館、博物館の来館者数やイベントの集客が少ない施設もあり、十分には活かされていない
- ・阪神地域の人々にも、文化資源やアートイベントがあまり知られていない
- ・イベント開催時に必要な制度や手続き等が煩雑で、地域の人々が活躍できる場所が少ない

将 来 へ の 取 組

● 阪神地域のアートが知られ、アートに取り組みやすい環境づくりが広がる

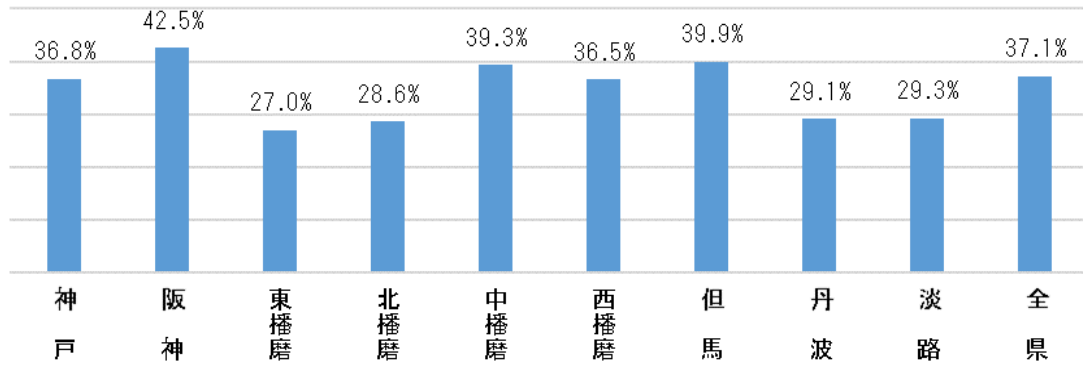
- ・地域の芸術活動を知ってもらうため、学校、美術館、博物館などの教育・学習機関と連携し、地域の人々が「観る」だけでなく「体験」して学ぶ
- ・阪神地域の内外で文化資源やアートイベントが認知されるよう、アートの魅力やイベントの情報を発信する
- ・身近な場所でのイベントや展覧会の開催や演奏動画配信等 ICT を活用した参加しやすい活動の“場”づくりに取り組む
- ・地域が支援する環境を整え、気軽に多様で幅広いアートに取り組むことができる仕組みをつくる

【まちづくり団体の声】

- ・イベントに参加する人が「ジブンゴト」として考え、「一緒に」楽しめるよう意識して取り組みたい。関わる人と一緒に意見を交わしながら、楽しく事業を盛り上げるように工夫している。
- ・イベント開催時は、できない人が頑張るより、できる人が少し手伝うような体制、義務ではなく、少しの時間でも気軽に関わることができるよう、広くゆるくつながっていきたい。

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査

お住まいの市・町では、芸術文化に接する機会があると思う人の割合



2030年頃の間画像

●様々な活動が生まれ、アートがあるという理由で人が集まるようになっている

- ・美術館や博物館とも連携し、音楽、舞台芸術、美術などの様々なイベントがオープンスペースなどを活用し、日常的に催され、多くの人々が参加して賑わい、交流している
- ・伝統芸能に興味を持って、新しく始める人が増え、後継者が生まれるようになっている
- ・地域間でのアートイベントの連携を強化するとともに、関係人口が生まれるようになる
- ・アーティストでなくても住民が気軽に参加できるイベントが多くあり、各地で様々な活動が生まれる
- ・「阪神地域にアートがある」という理由で人が集まるようになり、それに適したまちづくりをする

【みんなの声】

- ・イベントに参加する人は、地域づくりに参画しに来るのではなく、自分自身が楽しみに来る人ばかりである。そういう地域でありたい。

【文化団体の声】

- ・長年、培ってきた活動を継続するため、定期的に発表の場を設けているが、今後は小コミュニティとの交流を図っていきたい。

2050年にめざしたい姿

●アートが生まれる地になり、訪れたいようなにぎわいのあるまちになる

- ・いつでも気軽にアートの活動に参加できる環境があり、地域に住む人々の生活の一部になっている
- ・阪神地域で生まれるアートの魅力でクリエイターやアートに興味がある人々が集まり、新たなアートの活動が生まれ、コミュニティが盛んになる
- ・阪神地域に集まったクリエイターが地域の人々とアートの魅力を活かしたまちづくりをしている

【文化団体の声】

- ・事業に出演するアーティストと参加者並びに参加者同士が交流できるような事業を実施することで、芸術文化を通じたつながりや、さらなる活動の広がりを生み出す場を提供している。
- ・バーチャルなアートイベントが可能になれば、リアルなアートイベントは、美や芸術の鑑賞だけでなく、リアルな熱気を感じることに価値がシフトする。

※アート

このシナリオでの「アート」とは、芸術文化だけでなく、クリエイティブな活動や営み全般のことを指す

4 にぎわいのあるまち

訪れたい訪れやすい阪神地域ツーリズム

- 阪神地域にはのんびり過ごせる自然豊かな場所や発展した街、海浴いなど多くの魅力があり、多くの人にとって訪れたい街になる魅力があります。
- しかし、阪神地域の自然、絶景スポット、伝統文化の知名度は低く、触れる機会も多くありません。
- 阪神地域の魅力をより発展させ、地域の人が愛着を持ち、自然と多くの人々が訪れる阪神地域を目指します。

課題

将来への取組

● 阪神地域の魅力を地域に住む人々が認識できていない

- ・『伊丹諸白』と『灘の生一本』などの日本遺産、多彩な公園、西宮神社(えべっさん)、阪神間モダニズムなど歴史・伝統的な資源(人、モノ、文化、自然、景観など)が多彩にあるが、認知度が低い資源が多くあり、ポテンシャルを発揮できていない

(住んでいる地域に自慢したいスポットがある人の割合)
阪神地域：51.2% 兵庫県平均：54.3%

- ・国内旅行の需要が高く、日本遺産や歴史・伝統資源に関する観光客の探究意欲が高いが、阪神地域の特性や地域資源をアピールできていない
- ・観光スポットが点在し、スムーズに移動できない

【運輸関係団体の声】

- ・(阪神北地域は)日本への玄関口である関西国際空港、大阪港から大阪-京都を訪問する俗に言う“黄金ルート”から外れた印象がある。

【まちづくり団体の声】

- ・魅力の見せ方が重要。人の温かさや昔のものを大事にする「おしゃれ田舎」に魅力を感じる。

【観光関係団体の声】

- ・マイクロツーリズムでは、地域資源の磨きなおしが大切になると感じた。従来、「日本全国から」「世界から」「国際的」などがキーワードであったが、これからは県内の人に来てもらい、地域の魅力を知ってもらうというのが必要となる。

● 住んでいる人だけでなく、関わりのある人や興味のある人に知ってもらう

- ・阪神地域に関することを積極的に情報発信することで、新たなサービスが検討され、観光の多様化を進める
- ・観光業者や行政などが阪神地域を代表する観光スポット等で積極的にイベントを開催し、地域ブランドの魅力をアピールする
- ・阪神近郊地域の住民に、周遊情報や地域の情報などを発信し、気軽に訪れやすいマイクロツーリズムを推進する
- ・甲子園や宝塚歌劇など歴史のある地域資源も含め、新たな地域資源も発展させ、地域資源ごとのつながりを一体化してアピールし、誘客する

【学生起業家の声】

- ・「宿泊してでもいきたい」という資源がない。
- ・日帰り者をターゲットに空き家や古民家を活用したいが、市街地開発の規制が厳しい

【商工団体の声】

- ・今後は、観光その他により交流人口を増加させることで、事業者の持続的発展に繋げていく取組が重要になると感じている。

※マイクロツーリズム

自宅から1～2時間圏内や近隣地域への宿泊観光や日帰り観光のこと

阪神地域主要観光地への入込客数

(単位：千人)

阪神南地域				阪神北地域			
市町名	観光地名	入込客数	対前年比	市町名	観光地名	入込客数	対前年比
西宮市	阪神甲子園球場	3,836	-12.6%	宝塚市	清荒神清澄寺	3,020	-4.4%
西宮市	西宮神社	2,283	5.1%	宝塚市	宝塚北サービスエリア	2,625	-15.5%
尼崎市	県立尼崎の森中央緑地	636	6.6%	宝塚市	中山寺	1,274	-1.8%
西宮市	門戸厄神 東光寺	615	6.5%	宝塚市	宝塚大劇場	1,140	-10.9%
西宮市	廣田神社	565	46.4%	三田市	有馬富士公園	774	3.8%
尼崎市	尼崎市総合文化センター	348	-4.5%	宝塚市	あいあいパーク	692	-3.3%
尼崎市	尼崎城	211	711.7%	伊丹市	伊丹スカイパーク	682	1.2%
尼崎市	貴布禰神社	185	5.1%	猪名川町	道の駅いながわ	628	3.0%

令和元年度 兵庫県観光客動態調査

2030年頃の間想像

●阪神地域の魅力が浸透し、観光しやすい環境が整う

- ・阪神地域に関する知識が豊富なツアーコンダクターなど、観光に関する職業が人気になる
- ・阪神地域のブランド力が高まり、商品や観光地が有名になる
- ・県内や隣県、近隣の旅行先としてマイクロツーリズムで阪神地域を訪れる人が増える
- ・MasSの機能を活用し、観光地をスムーズに移動できるような整備がされている

【運輸関係団体の声】

- ・多様な観光地があり（宝塚大劇場・甲子園球場など）、臨海部や基幹道路、空港周辺には工業団地や物流施設が集積している。
- ・鉄道インフラが充実しており京阪神や空港へのアクセスが良いので、都市部流出を抑制し、地域の活性化の一翼を担っている。

2050年にめざしたい姿

●いつも誰かが訪れるにぎわいのあるまちになる

- ・マイクロツーリズムの普及などによって交流人口が拡大し、阪神地域全体が魅力ある観光地になる
- ・国内外から観光の注目地になり、いつも誰かが訪れるにぎわいのあるまちになる

【観光関係団体の声】

- ・（中国人のホテル利用者からは、尼崎はどこにもいくにも便利であるという回答があったので）狭い地域の資源だけでは人を呼び込むにも限界があることを踏まえ、周辺スポットとの近接性や、この地域の場所などを、全国的に周知することが最優先であると考えている。



現存する日本最古の酒蔵「旧岡田家住宅・酒蔵」

『「伊丹諸白」と「灘の生一本」 下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷』が日本遺産に認定（2020年）

江戸時代、伊丹、西宮・灘の酒造家たちは、優れた技術、良質な米と水、酒輸送専用の樽廻船によって、「下り酒」と称賛された上質の酒を江戸へ届け、清酒のスタンダードを築きました。酒造家たちの技術革新への情熱は、伝統ある酒蔵としての矜持と進取の気風を生み、「阪神間」の文化を育みました。六甲山の風土と人に恵まれたこの地では、水を守り、米を育てる人々、祭りに集う人々、酒の香漂う酒造地帯を訪れ、蔵開きを楽しむ人々が共にあり、400年の伝統と革新の清酒が造られています。

4 にぎわいのあるまち

美味しい「食」と多彩な「農」

- 阪神地域の多様な「農」や食に関わる活動拠点をアトラクションと位置づけ、地域全体をテーマパークと見立て、農業者、食関連等事業者、消費者が連携して都市・都市近郊農業の振興や地域資源の保全・活用を図り、阪神地域の魅力アップを目指す「阪神アグリパーク構想」を推進しています。
- 清酒発祥の地として盛んに営まれてきた日本酒のほか、歴史のある多彩な「メイド・イン・阪神」の食材がブランドとして確立し、地域がにぎわうことを目指します。

課 題

将 来 へ の 取 組

● 阪神地域こだわりの食材やブランドを維持する継承者が不足している

- ・働き方改革や定年延長により、農業継承するために、Uターンする人が減少している
- ・担い手の高齢化が進み、加えて次世代の担い手も減少する中、耕作放棄地が増加している
- ・生産数量が少ない品目や地域外流通もあることから、阪神地域の特産物の生産量や認知度が低く、地産地消の意識が醸成されにくい
- ・阪神地域の特産物を使った食育の機会が十分でない

【みんなの声】

- ・輸送技術の進化により、品質や鮮度の良い状態で地域外の農産物が量販店に並ぶ。阪神地域で作られた農産物が、既存の流通経路により、地域外へ出荷されることがあるため、地元農産物の認知度が低いように思う。

【農業団体の声】

- ・西宮や阪神南部地域では洋菓子などのブランド店も多く、全国区になっている。

● 就農希望者と農地を円滑に組み合わせる仕組み、ブランドが維持できる仕組みをつくる

- ・後継者の確保のため、農地情報など就農や規模拡大に必要な情報をより入手しやすい環境を整備する
- ・ロボット技術やICTを活用し、省力で高品質な農作物を安定生産するスマート農業の導入を進める
- ・障害者等の自信や生きがい創出され、多様な担い手で農が支えられるよう、農福連携の取組を進める
- ・阪神産農作物を購入したり味わう場所が増え、地元農産物等を使った旬の料理の提案や紹介ができるイベントを充実させる
- ・教育・学習機関と「農」と食に携わる人が連携し、講習やイベントを行うことで阪神地域の人の「農」と食に関する知識が増え、意識も向上する

【みんなの声】

- ・「阪神産食材の日」を設定し、学校給食やそれぞれの飲食店で献立を考えて提供すると、意識が高まり地域が元気になると思う。

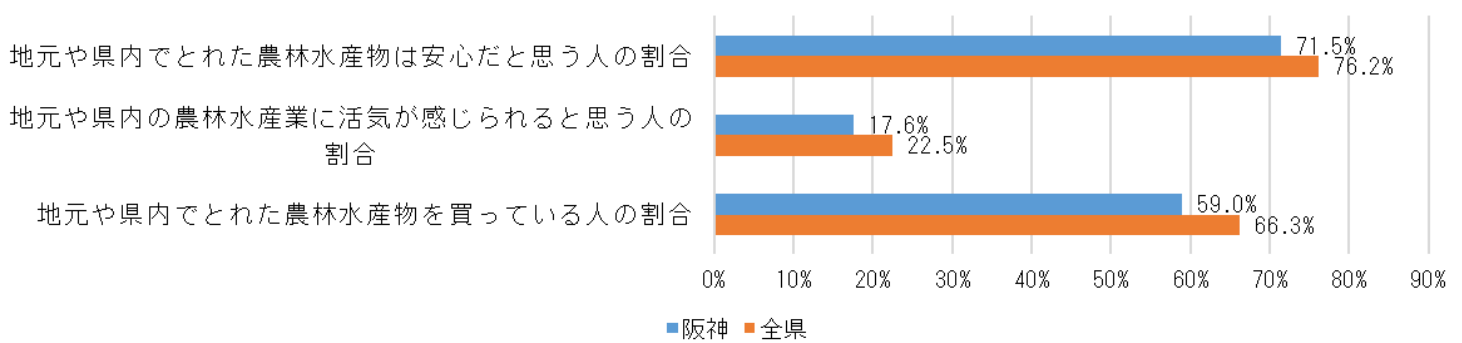


トマト



たみまるレモン

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査



2030年頃の間想像

● 阪神産食材の人気の高まり、就農希望者や後継者が増える

- ・「農地の賃借、売買」をサポートする仕組み（農地バンク）の活用が広がり、新規就農者や規模拡大を目指す農業者と農地の迅速なマッチングが進んでいる
- ・阪神地域の魅力的な食のスポットや、特産物の情報を簡単に得ることができ、食を通じた阪神産農産物の消費が拡大する
- ・スマート農業技術を活用した安定生産により、学校給食や多くの店で阪神地域の食材を積極的に活用することができる
- ・「農」と食に関する教育や学習機会が増え、生産者と消費者が交流する場が拡大している

【生産者の声】

- ・地産地消で消費者に生産したものがすぐ届くというのが強み。休耕地や畑があるので、若い人達に農業に触れてもらい若手就農者をいかに増やすかということが課題である。

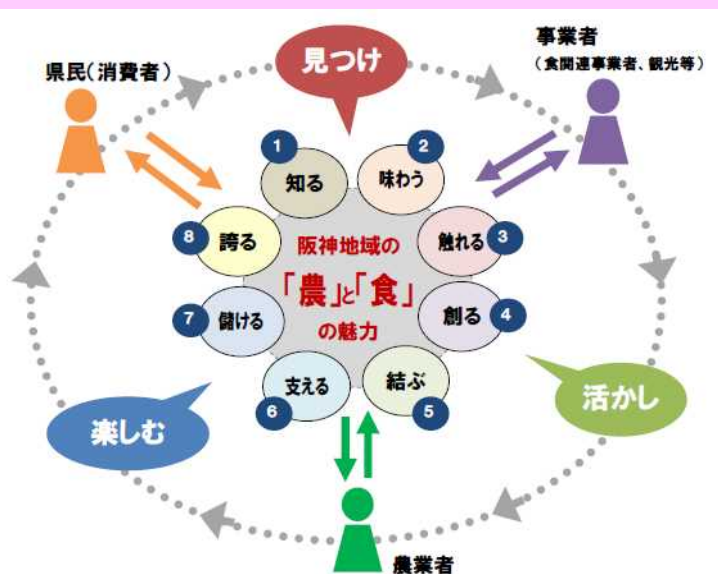
【農業団体の声】

- ・農業を法人化して生育状況の把握や農機の管理をすることで農家の負担を減らし、他業種からの就農者や転作（米作りから野菜作り等）する人が持続可能になればいい。

2050年にめざしたい姿

● 「メイド・イン・阪神」の食材がブランドとして確立し、人気が高まる

- ・農業に興味を持ち、阪神地域で「農業をやってみよう」と思う意欲的な人が参入し、農村常住人口が増加する
- ・「美味しい食のまち、阪神」として、他地域からの観光客が増え、阪神地域の各地で阪神産食材を使った料理を味わうことができる
- ・「農」や食についての教育・学習機会が身近にあり、意欲有る人が円滑に就農でき、阪神産農産物を用いる多様な食関連産業が確立されている



4 にぎわいのあるまち

まちなかのにぎわいを創出する

- 阪神地域には寺院が軒を連ねる寺町や城下町の面影があるエリアや、日本有数の酒造の町として歴史と文化に培われた見どころも多くあります。また、都市近郊にありながら豊かな自然に恵まれた地域でも、随所で貴重な史跡や文化財と出会うことができ、地域資源に恵まれた魅力ある場所が多くあります。
- 伝統的な祭りも各地にあり、身近にある神社、仏閣や地域の祭りなど、イベントなどを通してまちなかににぎわいを創り出すことを目指します。

課 題

将 来 へ の 取 組

●まちなかのオープンスペースや情報などが有効活用されていない

- ・商店街でも空き地、空き店舗が増え、まちの活力が損なわれている
- ・地元の祭りの担い手の減少により、祭りを存続させることが難しい
- ・西宮神社、門戸厄神東光寺、廣田神社、清荒神清澄寺、中山寺は観光客が多く訪れるが、まだ知られていない神社仏閣がある
- ・薪能、十日戎、尼崎市民まつり、えべっさん、西宮酒蔵ルネッサンス、西宮神社福男えらび、芦屋市民ギャラリーや宮前まつり、川西市源氏祭り、さんだ農業まつり、いながわまつりなどがあり、にぎわっている
- ・阪神地域の地域資源について知られていない

【川西市芸術団体の声】

- ・川西市にある歴史・文化的価値のある資源（多田神社、万願寺、石切山等）数多くあるが、より身近に感じられるように活用の仕方を工夫する必要がある。
- ・源氏祭りをはじめとした川西市内のイベントや歴史・文化資源を単独で考えるのではなくつなぎ合わせることで、さらなる付加価値をつけ魅力を高める。

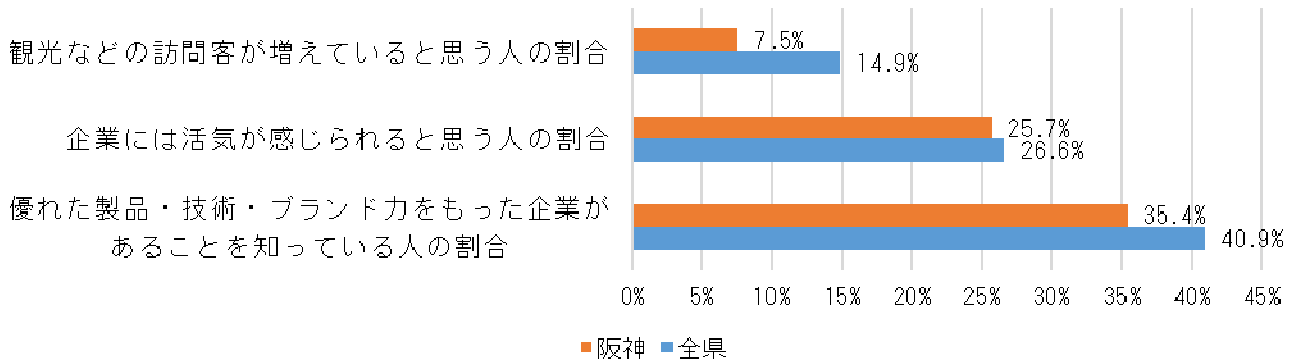
●地域のコミュニティやイベントに参加しやすい環境を整える

- ・試験的に空き店舗やオープンスペースなどを活用し、各地でまち歩きが楽しむことができ、にぎわいができるきっかけづくりをする
- ・コミュニティや地域への転入者も地元の祭りに携われるようルールやしきたりを変更する
- ・地域住民が、地域の伝統と文化について体験をすることで学び、「参加する人」、「支える人」、「楽しむ人」の人口を増やす
- ・イベントなどの情報が日にちや場所で簡単に調べることができるなど、わかりやすく、見つけやすくすることで、イベントに参加する人を増やす
- ・阪神地域の産業も地域資源であり、教育・学習機関と連携し、多くの人々に産業分野を知ってもらう

【川西市芸術団体の声】

- ・世代別のニーズに合ったイベントの開催、おしゃれなマルシェや朝市、夜市などを開催し、川西市内商店街の活性化を積極的に進める。
- ・市町村間と様々なイベントをコラボして、歴史文化の展示等についても繋がりある市町村間と連携し歴史の理解を深める。

令和3年度「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査



2030年頃の間画像

●にぎわいが生まれる環境ができ、意欲ある活用で発展する

- ・空地・空き家のリノベーションをしたり、再整備で活用した交流の拠点が生まれ、にぎわっている
- ・地域の専門家がファシリテーターとなり、地域の活動やにぎわいを支える
- ・参加したい人すべてが集える祭りやイベントが形成され、まちに活気がある
- ・地域に関わる人や新たに参加する人が気軽にイベントの立ち上げなどに参加でき、複業としても観光業につながり、成り立っている
- ・阪神地域の工場見学、産業発祥の地などを観光資源とした産業観光が拡大する

【中間支援 NPO 法人の声】

- ・「自助・共助・公助」があるが、「共助」の弾力性が強い地域が生き残る。今までボランティアで支えてきたとすれば、今後はビジネス的な方法、持続可能性のある手法で共助の形を作っていくことが大切である。



地域住民によるイベント

2050年にめざしたい姿

●地域資源が継承され、交流やイベントも行われるなど、地域がにぎわっている

- ・空き店舗やオープンスペースをアプリ予約などで気軽に活用できる仕組みができる
- ・地域資源が柔軟に活用され、いつでも人が集まる、楽しむしかけが広がっている
- ・多くの人が祭りやイベントに集い、地域でコミュニティが生まれ交流している
- ・阪神地域の環境や文化を認知・理解し、時代にあった様々な働きかけを行いながら文化を築き上げ、世代を超えて積み重ねた様々な地域資源が継承される

【イベント団体の声】

- ・個々のスキルを活かす場を最大限のプラットフォームで用意する。
- ・イベント関係者は現在千人以上であるが、スタート時は15人くらいの実行委員会だった。昆陽池自治会で説明会を開き、周辺住民の理解を得た。お互いに理解してもらっている人に仲介してもらった。
- ・イベントは、表現と活躍のプラットフォーム。場所と資金と集客はイベント団体が行い、あとはおまかせである。場所と市民・団体をマッチングする。

4 にぎわいのあるまち

みんなで楽しむスポーツ

- 阪神地域には複合スポーツ施設「尼崎スポーツの森」、芦屋浜にビーチバレーコート、西宮にヨットハーバーなどの施設があり、子ども向けのスポーツ教室も開催されるなど、スポーツに親しむ機会、場所は多くあります。
- 甲子園球場の高校野球やプロ野球の観戦者数は年間およそ 400 万人を数え、アメリカンフットボールの「甲子園ボウル」も開催され観戦するスポーツも熱を帯びています。
- 多様なスポーツを見たり、することが盛んになり、スポーツが生活の一部となることを目指します。

課 題

将 来 へ の 取 組

●スポーツを楽しむコミュニティや環境が整っていない

- ・甲子園球場は、高校野球の聖地として、プロ野球チームのホームグラウンドとして、多くのファンを集めている。また、プロバスケットボールチームや関西独立リーグに所属するプロ野球チームがあるが、全国的に兵庫県にあることが十分に認知されていない
- ・体力や年齢に応じたスポーツを始める機会や対応したコミュニティが少ない
- ・スポーツを「する」だけでなく、「観る」「支える」を含めた、スポーツへの関わり方やマイナースポーツの認知の拡大が必要である
- ・山や海でのスポーツなど、アウトドアスポーツ活動への関心が高まっているが環境が整っていない

●スポーツへの関心が深まり、多様なスポーツを楽しむ

- ・スポーツ施設を PR し、近隣の様々な施設等との連携を強化するなど、阪神地域へのスポーツツーリズムを推進する体制を構築する
- ・スポーツ教室の開催など、身近な場でスポーツを体験する機会を増やし、地域住民のスポーツへの意識向上に取り組む
- ・ダーツ、ビリヤード、競技かるた、eスポーツなど競技人口が少ないスポーツは、教室を開催し、普及やイメージアップに取り組み、競技人口を増やす
- ・学校や企業と連携し、人材交流や施設開放、様々なスポーツの種類や関わり方の認知向上、体験会の開催などを進める
- ・密を回避した自然を体感する北摂での里山スポーツや芦屋浜でのマリンスポーツの活動が増え、認知されるようになり、盛んになる



モルック(尼崎 21 世紀の森中央緑地)

【川西市で活動するサイクリングチームの声】

- ・サイクルマップはあるが、スポーツサイクルを借りる場所がないので、手軽に始められない。
- ・県内では播磨中央公園にサイクルステーションができるようだが、1か所では意味がない。県民局エリア毎に1か所は整備が必要。
- ・自転車を通勤に使う人が増加したが、活用できるサイクルロードが少ない。



阪神甲子園球場（西宮市）

【芦屋ロックガーデン】

六甲山系を上る無数のルートの中でも、奇岩群を超えながら上るロックガーデンは1年を通して多くの登山客でにぎわう人気のルートです。

朝日新聞の新聞記者をしながら、登山家として活動した藤木九三氏が住宅地から近いこの場所でロッククライミングを始め、日本におけるロッククライミング発祥の地として知られています。

2030 年頃の間像

●スポーツツーリズムの活性化とスポーツに関わる機会の増加

- ・阪神地域のスポーツツーリズムが人気を呼び、試合等イベント後の継続的・発展的な効果を見据える
- ・多種多様なスポーツの競技人口が増え、気軽にスポーツに取り組む機会や場所ができる
- ・阪神地域がスポーツに関する知識の集積地となり、スポーツを支える人が増える
- ・サイクルスポーツやトレイルランが里山スポーツで人気になる

【スポーツ団体の声】

- ・スポーツと文化の融合領域があって地域が元気になる。ダンス、スケートボード、BMXなど、騒音の問題もあるが伸ばしていきたい。



車椅子バスケットボール

2050 年にめざしたい姿

●スポーツが地域を支え、阪神間でスポーツが生活の一部になる

- ・スポーツをする人や支える人が集い、スポーツのまちとして新たな産業がうまれている
- ・地域住民が日常的にスポーツを行える場として、誰もが、いつでも、どこでもスポーツに親しむことができるようになる
- ・阪神地域の自然を活かしたスポーツが、地域に住む人の生活や文化の一部となり、様々な年代に親しまれる

※スポーツツーリズム

スポーツの観戦や参加を目的として、スポーツに関わるためにその地域を訪れる観光のこと



運河博覧会によるイベント